学　位　論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

１．申請者氏名	米崎　里
２．審査委員	主　　査：（鳴門教育大学教授）　　伊東治己 副主査：（岡山大学教授）　　　　高塚成信 委　員：（上越教育大学准教授）　大場浩正 委　員：（兵庫教育大学教授）　　大嶋　浩 委　員：（鳴門教育大学教授）　　前田一平

３．論文題目

An Empirical Study on the Effectiveness of Output Activities Focused on Oral Reading for Improving EFL Learners' Speaking Skill（スピーキング力を高めるための音読を軸としたアウト プット活動の有効性に関する研究）

４．審査結果の要旨

論文提出による学位申請者 米崎　里氏　から申請のあった学位論文について，兵庫教育大学学位規則第１６条に基づき，下記のとおり審査を行った。

論文審査日時：平成２５年７月２８日（日）　１４時３０分～１５時３０分

場所：鳴門教育大学　人文棟３階　第一教員合同研究室

(1)学位論文の構成と概要

（構成）

1章　序論（Introduction）

2章　外国語教育の歴史と音読（A Brief of History of Foreign Language Education and Oral Reading）

3章　音読プロセスとスピーキングプロセスの比較（Comparing Oral Reading Process and Speaking Process）

4章　実験１：Taxing Oral Readingにおける認知的負荷の実証（Experiment 1: Verifying High Level of Cognitive Load in Taxing Oral Reading）

5章　実験２：スピーキング力と音読力の関係に関する調査（Experiment 2: Investigating the Relationship between Speaking Ability and Oral Reading Ability）

6章　実験３：スピーキング力と音読力の関係に関する再調査（Experiment 3: Investigating Further the Relationship between Speaking Ability and Oral Reading Ability）

7章　実験４：スピーキング力を改善するための音読活動の効果に関する調査（Experiment 4: Investigating the Effectiveness of Oral Reading Activities to Improve Speaking Ability）

8章　実験５：スピーキング力を改善するための音読活動の効果に関する再調査（Experiment 5: Investigating Further the Effectiveness of Oral Reading Activities to Improve Speaking Ability）

9章　結論（Conclusion）

（概要）

本研究は，音読をスピーキング能力を向上するための手段として再評価し，音読能力とスピーキング能力との関係を明確にし，継続的な音読を軸とした活動を指導することにより，実際に学習者のスピーキング能力を高めかという点について，実証的に調査することを目的としたものである。

まず，理論的研究として，音読とスピーキングの関係を明確にした。スピーキングのプロセスには語彙的・文法的言語化（lexical and grammatical encoding）の要素が重要な役割を果たしている。一方，普通の音読は，スピーキングのプロセスとの共通点が少なく，様々なタイプの中で，顔上げ音読

(read and look up)では語彙的・文法的確認（verification）の要素が，なりきり音読(personalized oral reading）では語彙的・文法的再構成（restructuring）の要素が含まれている。その結果として顔上げ音読やなりきり音読の音読活動は普通の音読より，認知的負荷が高く，スピーキングで生起している認知プロセスに近くなると推察される。しかしながら，顔上げ音読やなりきり音読では，語彙的・文法的再確認や再構成のプロセスを経ない場合，認知的負荷はそれほど高まらないことが分かった。そこで本研究は，なりきり音読の応用版である，なりきりQ&Aも常に認知的負荷の高い音読活動として位置づけた。

次に，実験的研究として，まず初めに，様々な音読がある中で，どの音読力がスピーキング力と相関関係があるのかを実証的に調査した。その結果，顔上げ音読や，顔上げ音読＋なりきり音読のような同じ音読でも認知的負荷の高い音読ほど，スピーキング能力と深い関係があることが分かった。さらに，音読活動を軸としたアウトプット活動を日々の授業の中に取り入れ，継続することによって，学習者のスピーキング力の向上にどのような学習効果をもたらすのかを調査した。認知的負荷の高い音読を実施した実験群と，認知的負荷の低い音読を実施した統制群に２ヶ月間それぞれ音読活動を継続的に実施すると，認知的負荷の高い音読のほうがスピーキング力の向上につながった。さらに，グループを認知的負荷の高い音読グループ（統制群），顔上げ音読，なりきり音読など認知的負荷の高い音読グループ（実験群１），なりきり Q&A も取り入れた認知的負荷の高いグループ（実験群２）の３つに分け，６ヶ月間それぞれの音読活動を継続に実施した。その結果，２ヵ月後では統制群と実験群２の間で有意差が見られたが，６ヵ月後には統制群と実験群２の間にも有意差が見られた。以上の結果から，様々な音読がある中で，認知的負荷の低い音読より，認知的負荷の高い音読を継続することにより，スピーキング力の向上につながりやすいということが結論付けられた。とりわけ本研究で提案したなりきり Q&A はスピーキング力を高める上で有効であることが判明した。

(2)審査経過

・論文の意義や独創性（学校教育の実践への貢献あるいは社会的貢献を含めて）

昨今の英語教育では，コミュニケーション能力，とりわけスピーキング能力を高めることが重要視されているが，スピーキング活動は誰もが取り組むことが出来る活動ではない。本研究はスピーキング能力の改善するための活動として，音読に着目した。音読は，伝統的な活動の１つであり，たとえクラスサイズが40人であったとしても誰もが取り組める活動である。日本の学習環境に適している音読に注目したところに本研究の意義がある。

次に，本研究は，音読をスピーキング能力を向上するための手段として再評価し，音読とスピーキングの関係に着目したところに独創性があるといえよう。音読と４技能に関して言えば，これまで，リーディングやリスニングとの関係を実証した研究はあるが，スピーキングとの関係を実証した研究はほとんどない。

最後に，音読を軸としたアウトプット活動がスピーキング能力に有効であるかを実証するため，６ヶ月にわたり実証調査を行ったことが論文としての意義がある。この実証調査は，今後の学校教育への実践への貢献につながるだろう。今後，スピーキング能力を高めるために，本研究が示した音読活動を軸としたアウトプット活動に，多くの教員が取り組んでくれることを期待する。

・論文の発展性（今後の研究課題）

今後の課題として，まず，本研究は高校生を対象として調査されたに過ぎないので，実験の拡大が望まれる。今後，中学生，あるいは大学生にとっても音読を軸としたアウトプット活動がスピーキング能力向上に有効であるか，またどのようなテキストが適しているか，実験期間はどれくらいが適しているか等実証していく必要性がある。

２点目として，認知的負荷の高い音読かどうかの検証は，間接的な証明に過ぎないので，今後研究費等を申請できる環境にあるならば，脳波を調べるなどより直接的な証明をすることを期待する。

(3)審査結果

以上により，本審査委員会は米崎　里氏の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し，全員一致で合格と判定した。